

博士学位論文審査要旨

2017年6月20日

論文題目： ローマ帝国支配期カルタゴ周辺地域における文化と記憶

学位申請者： 井福 剛

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 中井 義明

副査： 京都大学大学院文学研究科 教授 南川 高志

副査： 文学研究科 教授 服部 伸

要 旨：

本学位請求論文はローマ帝政期の属州アフリカにあった古代都市トゥッガを対象とする。はじめに 従来、地方は首都ローマの文化を移入することによって都市化を推し進めたと考えられてきた。しかし、ポストコロニアル理論の高まりとともにこの伝統的枠組みは批判にさらされる。「ローマ化」に対する地方の「抵抗」が注目されるようになる。しかし申請者はこれらに賛同しない。属州のローカル・エリートによる戦略的「選択」という枠組みが提示される。

第1章及び第2章 トゥッガはフェニキア人やリビア人などの原住民系のキウィタスとローマ人入植者系のパグスから構成されていた。トゥッガのエリートたちは二つのコミュニティ融合に向けて2世紀に及ぶ活動を展開した。マルキウス氏(第1章)とガビニウス氏(第2章)が取り上げられる。両氏とも原住民系エリートで、ローマ人入植者の選挙区に移籍し、「パグスとキウィタスの保護者」職などを歴任し、ローマ・カルタゴ様式の神殿を奉獻している。彼らローカル・エリートたちの活動が両コミュニティの接近や205年の都市統合をもたらしたと評価される。

第3章 本章で取り上げられるサトゥルヌスはローマの農業神であるが、カルタゴの豊穡神バアルと習合して広く崇拝されていた。サトゥルヌス神殿がキウィタスに留まらず、パグスにおいても建立され、都市統合直前にはバアルの古い神域上に建立されている。申請者はここに宗教的アイデンティティ構築を図るローカル・エリートの戦略的「選択」を見るのである。

第4章及び第5章 トゥッガが範としたのは新カルタゴだった。ポエニ時代のカルタゴは前146年に姿を消していたが、ローマ人は「狡猾」とか「残虐」というイメージを抱き続けた(第4章)。しかしその旧カルタゴと密接に結びつくカエレスティス(タニト)女神はトゥッガにおいて篤く信仰されていた(第5章)。その理由はカエレスティスが「理想のローマ都市」カルタゴを象徴し、そのカルタゴを通してトゥッガの人々が「ローマ的」な都市を見ていたからと分析される。

結論 都市統合を積極的に推進したトゥッガのエリートたちは原住民系の文化と外来のローマ文化との接合によって都市統合へのアイデンティティ構築を図った。「ローマ化」も「抵抗」も枠組みとしての有効性を失っている。近年、古代社会を多言語・多文化という側面から見直そうという動きがあるが、申請者は「読解」という行為による評価を試みる。この新しい枠組みが帝政期トゥッガに関してその文化的基盤を説明するのに有効であると判断した。

よって、本論文は博士(文化史学)(同志社大学)を授与するにふさわしいと認められる。

総合試験結果の要旨

2017年6月20日

論文題目： ローマ帝国支配期カルタゴ周辺地域における文化と記憶

学位申請者： 井福 剛

審査委員：

主査： 文学研究科 教授 中井 義明

副査： 京都大学大学院文学研究科 教授 南川 高志

副査： 文学研究科 教授 服部 伸

要 旨：

上記審査委員は、井福剛氏に対する学力確認審査を2017年6月20日（火）午後4時半から約2時間実施した。

総合試験において本学位申請者は提出された論文の内容に関する口頭試問に対して適切な応答をし、論文の意義とその研究水準の高さを示すとともに、研究の背景となる方法論に対する関心と知識についても十分な専門的知識を有していることを明らかにした。

また語学試験（ラテン語、英語、フランス語、ドイツ語）においても本学位申請者が研究上要求される読解能力と運用能力を十分に持つことが確認された。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目：ローマ帝国支配期カルタゴ周辺地域における文化と記憶
氏名：井福 剛

要 旨：

ローマ支配期北アフリカの文化に関する研究は、20世紀初頭のハヴァフィールドの研究以降、ローマ化概念を軸に解釈されてきた。このローマ化を中心にした研究は、その言葉が示す通り、ローマ文化がいかに浸透したかに関心が寄せられたため、ローマの支配を受ける前から存在する文化については「消え去りいく文化」として触れられる程度である。

こうしたローマ化を中心とした解釈に対して1960年代頃から批判が行われるようになり、近年ではポストコロニアル理論の影響を受けた属州研究者がそうした批判の中心を担っている。ポストコロニアル理論の影響を受けた研究者たちは、異種混淆化、クレオール化という概念を用いた属州研究を提唱し、従来のローマ化を中心とした属州研究を帝国主義的言説として退けた。

本稿では、以上の研究動向を踏まえた上で、どのような状況で異種混淆的文化が生じたのかという問いを出発点とする。異種混淆的文化が生じてくる過程を具体的なコンテキストに置くことで、単に文化が混じり合ったというだけではなく、その文化がもつ現地の人々にとっての意味に迫ることが可能となる。

第1章では、宗教的实践を具体的に見ていくために、北アフリカの都市トゥッガにおけるマルキウス氏族に焦点を絞り考察する。ローマの支配に入ってから以降、トゥッガには現地の人々のコミュニティであるキウィタス(civitas)と、ローマ市民権保持者のコミュニティであるパグス(pagus)の二つのコミュニティが存在していた。マルキウス氏族は、現地の人々のコミュニティであるキウィタスから台頭し、ローマ市民権を獲得してパグスのメンバーとなったエリートである。また、両コミュニティの保護者を複数のメンバーが担ったことから、二つのコミュニティをつなぐ役割を果たしたと考えられる。そのようなマルキウス氏族のメンバーが建設したのが、166-8年頃に建設されたカピトリウム神殿である。

カピトリウム神殿は両コミュニティが新たな段階にいたる中で建設された。この神殿建設は、二つのコミュニティが一つのまとまりとなって形成される新たな「トゥッガ」を意識し、それにふさわしい宗教のあり方、都市の景観のあり方をエリート層が選び取った結果として捉えることができる。このカピトリウム神殿は新たな段階にいたったトゥッガの宗教的アイデンティティの象徴として機能したのである。

第2章では、ガビニウス氏族に焦点を当て考察する。マルキウス氏族同様、この氏族もキウィタスから台頭し、ローマ市民権を得たエリート層である。マルキウス氏族とほぼ同時期に多くの公共建築物を建設し、両コミュニティをつなぐ役割を果たしたと考えられる。

このガビニウス氏族のメンバーが建設したのが117年-138年頃に年代づけられるコンコルディア、フルギフェル、リベル・パテル、ネプトゥヌス神殿である。この神殿には昔から現地で信仰されていたと考えられる神々とローマの神が同時に祀られていた。つまり、この神殿はそれぞれのコミュニティにとって重要な神々が祀られていたことになる。ガビニウス氏族のような両コミュニティと関係をもつエリートが、それぞれのコミュニティに目配せの効いた神殿を建設したのである。この神殿はムニキピウムになる以前の二重のコミュニティであった時期に、両者をつなぐシンボルとして創り上げられた信仰の一事例であったといえるだろう。

第3章では、194/5年頃というトゥッガがムニキピウムになる205年のまさに直前の時期に建設されたサトゥルヌス神殿について考察する。この神殿に祀られたサトゥルヌスは、バアル神が

ローマ時代に名を変えたものであると考えられている。こうした古くからのキウィタスにおける神を祀った神殿を、現地の人々にとっての特別な場所であるバアル神の聖域に建設したのである。サトゥルヌスというキウィタスにおいて重要な神を祀ると同時に、パグスのローマ市民権保持者にとって、自身の属する「ローマ世界」において支配的であるローマ文化の神殿形式を流用した結果、創造されたのがこのサトゥルヌス神殿であったといえる。

当時のトゥッガの政治状況がトゥッガの人々に両コミュニティをつなぐ信仰のあり方の選択を促し、そうして創り上げられた神殿が新たな段階にいたりつつあるトゥッガのシンボルとして機能したのである。そのような文化的実践の積み重ねの結果、205年に行政区分上は両者の境界は解消され、二重性を内包しながら一括りの都市へといたることになったと考えられる。サトゥルヌス神殿はそのような両コミュニティをつなぐ実践の一事例とみなすことができるのである。

第4章では、ポエニ戦争後から帝政初期にかけてのローマの著作に表れてくるカルタゴ・イメージについて分析する。ギリシア人以来の使い古された狡猾で、残酷で、不誠実なカルタゴ人像だけではなく、その延長線上にありながらも、ネガティブなイメージが強調され、残虐性の際立った形のカルタゴ・イメージが共和政末期から帝政初期にかけての時代に現れてくる。こうしたネガティブなカルタゴ・イメージは、「内乱の一世紀」においてローマ人内部の敵に用いられるようになる。カルタゴ・イメージは、国家が転覆しかねない状況において、国家を脅かすローマ人に対して敵のイメージを付与するために用いられた。つまり、カルタゴ・イメージはローマ市民の中に「味方」と「敵」という境界を作り上げるための便利な道具として用いられたと考えられるのである。

第5章では、カルタゴの記憶と再建後のローマ都市カルタゴの関係について考察する。カルタゴ植民市はローマ帝国の *Concordia* を体現するかのよう都市として再建されたにもかかわらず、そこには第4章で論じた敵対者であるポエニ期カルタゴにまつわる記憶として *Discordia* がつきまとっていた。

さらに、こうしたカルタゴの記憶を想起させたのは再建された都市カルタゴだけではない。ポエニ期カルタゴ由来とされる文化に関しても、かつてのカルタゴの記憶がつきまとっていたのである。ポエニ期カルタゴ由来とされる女神カエレスティスは、カルタゴにおいてはかつてのカルタゴの偉大さを想起させ、都市アイデンティティを強化するものとして、トゥッガにおいてはローマ都市の代表であるカルタゴの「ローマ的」文化として、何の齟齬もなく受け入れられていたと考えられる。しかしながら、同時にカエレスティスは、かつてのカルタゴとつながりをもつものと意識されていた。つまり、「ローマ的」文化の一部となりながらも、つねにかつての敵であったポエニ期カルタゴの記憶を想起させる可能性があったといえるだろう。

本論の考察から、トゥッガのローカル・エリートがさまざまな公共建築物を建設する中で、同じように新たな宗教的アイデンティティを模索しながらも、そこには「ローマ文化」や「現地文化」というカテゴリだけでは捉えきれない多様な表出のあり方が存在していたことが分かる。こうしたローカル・エリートの宗教的实践によって都市の景観は変化し、トゥッガの人々は新たなコミュニティへと自らの都市が変化していることを、視覚的に認識することになったと考えられる。

さらに、カルタゴ植民市やカエレスティス神殿の事例のように、エリート側の意図を越えた意味が読み取られる可能性も指摘できる。ローマ都市としてのカルタゴや「ローマ風」のカエレスティス神殿を見る際に、人々はそこに「ローマ文化」を見ると同時に、かつてのポエニ期カルタゴの記憶を想起する可能性も存在していたのである。

また、植民市カルタゴと深い関係があるトゥッガの人々にとって、海の向こう側の都市ローマよりも、身近にあるローマ都市カルタゴの方が、ローマを体現するものとして機能したことも指摘できる。カルタゴ周辺地域の「ローマ」のイメージは、全てが直接都市ローマに由来するわけではなく、ローマ都市カルタゴを通して形作られたと考えられるのである。

そのような、部分的であったとしてもカルタゴを通して形成された「ローマ的なるもの」は、正確に「ローマ」を表象していたわけではない。そこには北アフリカで古くから信仰されていた神々やカルタゴの記憶を帯びた神々も含まれてくるのである。

都市ローマの政治的、象徴的な中心性は否定できないが、文化面においては「ローマ文化」を代理＝表象するカルタゴのような地方都市が存在し、それが地方において「ローマ的なるもの」を形成する要因となっていたとするならば、「ローマ文化」、「ローマ的なるもの」の属州化ともいえる現象が起きていたといえるだろう。ここでいう属州化は「ローマ的なるもの」が属州ごと、地方ごとに複数化していくことを意味している。この属州化によって、ローマ帝国内で共通する「ローマ的なるもの」に、地方ごとの特殊性が生じることになったと考えられるのである。